美術の時間ですよ エコジャポ

徳島県立近代美術館企画交流室長
森　芳功 の

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その93　「視覚障害者とつくるワークショップ」のこと

「25のとびら展」ワークショップ

「開館25周年記念　人間表現を楽しむ25のとびら展」では、当館が所蔵する人間表現の名品をご覧いただくとともに、誰もが美術館で楽しめるよう、機会を広げることを目標にしています。そのため、鑑賞に親しむ催し、造形や演劇、音楽と関わらせたワークショップなどを合計三三回開催。子どもや高齢者、障がいをもつ人、外国人など、さまざまな個性をもつ人が参加できるようにしました。今回はそのなかから、視覚障がい者の方が参加した催しをご紹介することにしましょう。

全盲の方がナビゲーター

当館では五年ほど前から、障がいをもつ人にも美術館で楽しんでもらえるよう試みを重ねてきました。多くの人から学びつつ取り組んでいますが、「25のとびら展」では、また二つ新しい視野が開けたように感じました。東京を中心に活躍する「視覚障害者とつくるワークショップ」のみなさんを講師に迎えて催しを開くことができたからです（担当：竹内利夫上席学芸員、亀井幸子係長）。

このワークショップでは、全盲の人が司会進行（ナビゲーター）をつとめ、目の見えない人と晴眼者がいっしょに絵や彫刻を楽しみました。講師は、代表の林建太さんほか三人。二〇名の参加者は、全盲の木下路徳さん、瀬戸洋平さんをナビゲーターとする二つのグループに分かれ、晴眼者の林さん、鄭晶晶（ていじょうじょう）さんがサポートにまわりました。

私は、グループで自己紹介をするウォーミングアップのときから、このワークショップの雰囲気に惹き込まれました。参加者の半数近くが目の見えない人で、子どものときに視力を失った人、五年くらい前までぼんやり見えていたという人など、それぞれが自身について語ってくれました。美術館に来たのは、ほとんどの人がはじめてとのこと。晴眼者は、ヘルパーをしている人、コミュニケーションの仕方を学びたいと思っている人、学生さんや学校の先生などが参加しました。

人間表現の展覧会を観るワークショップということもあって、まず初対面の人と会ったときに気にする点が話題となりました。木下さんは、その人の声の高さや音質が好きかどうかをチェックするといいます。他の視覚障がい者の方からは、「すてきな声ですね」と言いたくなることがあると聞きました。

少し驚いたのですが、ナビゲーターの方はそのような自己紹介や意見交換の司会を、参加者の声と名前をしっかりと覚えて少しの滞りもなく進めていました。私でしたら、名前や発言内容をメモしないと、はじめて集まった人たちの司会進行は不安になるのですが・・・

チームプレーによる鑑賞

会話をはずませてからグループごとに展覧会場に移動し、作品の前で感想を交流します。代表の林さんによると、そのときのナビゲーターの役割は、①情報の共有を促す、②参加者の見方を引き出す、③一緒に楽しむことにあるといいます。

「情報の共有」は、視覚障がい者の方が鑑賞に参加するうえで、とても大事な活動となります。観ている作品が彫刻なのか、絵画なのか、あるいは写真なのか、説明しないと分からないからです。目の見える人であれば説明が必要でないことも、それを飛ばして深い話に入っていくと、見えない人はついていけなくなってしまいます。しかし、事実の説明だけでは面白い鑑賞になりません。作品を観てどう思ったのか、どのように感じたのか、なぜ好きになったのか、それぞれの人の見方を交流するのが楽しい時間となるからです。「②参加者の見方を引き出す」は、そのために行います。

阿部展也〈犬にかまれた男〉（一九五七年）を観たとき、グループのなかから出てきた感想は、「かわいい」→「かわいいだけではない」→「信用できない感じ。かわいいけど熊っぽい」→「みなさんの話を聞いて、熊が獲物をくわえて喜んでいるのかな」（全盲の参加者）。というように、感想や意見が次々と出てくるので、見えない人は、それらの情報を統合したり取捨選択したりしながら、自分なりのイメージをつくっていきます。「絵の周りはどうなっているのですか？」などと、見えない人が質問を挟みつつ、意見の交換が続けられました。

〈犬にかまれた男〉は、描かれているのが犬なのか、それとも犬に噛まれた男なのか定かでなく、どこか人を喰ったところがある作品です。解釈の定めにくさが逆に想像を刺激し、意見交流を促進させていきます。

何人かのグループで作品を観ると、気づいたことや感想、解釈などがいろいろと集まり、参加者のなかで作品のイメージを豊かに肉付けすることが可能となります。とくに全盲の人がナビゲーターになると、見えないだけによき聞き役となり、参加者の意見が引き出されていくようです。目が見えると、自分一人で分かったつもりになって言葉にしないことがありますが、それも避けやすくなるのでしょう。人の話から作品のイメージをつくっていく全盲の方は、そのような意味で、作品を共同で観るときのリーダーとしてすばらしい役割が担えるのだと思いました。

「25のとびら展」出品作　ヴィルヘルム・レームブルック〈ザリー・ファルクの肖像〉1916年

条件に違いはない

「視覚障害者とつくるワークショップ」の活動を拝見していると、美術鑑賞の幅が広がっていくように感じます。瀬戸さんは、グループ鑑賞のとき、最初違和感があってすっきりしない作品でも、いろいろな人と対話するなかで楽しくなっていくといい、「自分の見方など簡単に変更できるんだと思う」と語っています。それは、自身の見方感じ方にこだわりすぎて鑑賞を窮屈にしている人にとって、解放感が得られる言葉ではないでしょうか。人と人との関係を大事にすると、出てくる意見からその人の人間性が伝わり、共感できることも増えてきます。そのようないい関係のなかでは、見方の変更も、自由さや新鮮さを感じる体験になると思うのです。

フェルナン・レジェ〈美しい自転車乗り〉1944年

木下さんのお話のなかでは、トニー・クラッグ〈カスト・グランシイズ（投げかけられた視線）〉（二〇〇二年）の感想が興味深く感じられました。この彫刻作品は、一見するとソフトクリームや絞った雑巾のように思え、角度によっては、人の顔のような形も見えてくる彫刻作品です。視覚障がい者の人たちに手で触れてもらうと、木下さんは、自分のなかでつくっていたイメージよりもシンプルな構造なので、「なんでこんなにあっさりしているんだ！」と思ったそうです。それは、下見のときのイメージと比較できた楽しさだったようで、「その裏切られた感にしびれた」とも述べています。

この作品の感想のなかで私がもう一つ興味深く思ったのは、中途失明の木下さんが、小学生のときに見た地層を思い出し、「来たっ～」と感じたというお話です。以前に経験したことと作品が結びつくと、鑑賞する人のなかで作品のイメージは大きくふくらんでいきます。そのようなイメージは、観る人の個性とつながっていますので、「来たっ～」と思えるほど情動が動いたときは、自分自身の個性のありかの一つが自覚できる機会になるのかもしれません。

そのように考えていくと、脳裏で自身と作品をつなぐイメージを形づくり理解を深めていく、鑑賞のいちばん大事な部分では、見える人と見えない人の条件に何ら違いがないことに気づかされます。

待ち望まれていた催し

視覚障がい者の方と作品鑑賞をすると、私はいつも鑑賞の奥深さについて考えさせられ、刺激をもらいます。今回のワークショップ（二〇一五年一〇月三日）や講座（二月一日）でも刺激と充実感が得られたのはもちろんです。しかも、目の見えない人を支援する場としてでなく、晴眼者も視覚障がい者も同じように楽しむことができるワクワクする体験となりました。

「視覚障害者とつくるワークショップ」の開催は、西日本では今回がはじめてです。そのため広島県や香川県など県外からも参加があり、東京や千葉のお客さまも参加してくれました。地元徳島では、県庁の障がい福祉課の声のたよりで予定を知り、参加してくださった方もいます。広く待ち望まれていた催しといえるのです。目の見えない人と見える人がふつうに交流でき、活躍できる場を、作品鑑賞を通じてもっと広げていければと思います。

1月の催し

■**開館25周年記念「人間表現を楽しむ25のとびら展」**11日［月・祝］まで

■**開館25周年記念「同時代のアーティストたちの表現」**16日［土］から

■**「チャレンジとくしま芸術祭2016」展示部門**　19日［火］～31日［日］、**パフォーマンス部門**　1月24日［日］9：45～16：40